

ナルデメジントシル酸塩錠導入による有害事象の調査

植木彩、瀬川和子、垣尾尚美、辻本純子
兵庫県立柏原病院 薬剤部

【目的】

オピオイド誘発性便秘症治療薬であるナルデメジントシル酸塩錠(以下ナルデメジン)は国内臨床試験において下痢、腹痛といった消化器系有害事象が多く報告されている。当院では2017年7月からナルデメジンの使用を開始した。今回ナルデメジン使用患者における有害事象についてカルテ調査を行ったので報告する。

【方法】

電子カルテシステムを使用し、2017年7月から10月までのナルデメジン服用患者のナルデメジン開始時の使用オピオイド、ナルデメジン服用前の緩下剤、排便状況、消化器症状について後方的に検索した。

【結果】

調査期間中にナルデメジンを使用していた患者は6名であった。6名全員ががん性疼痛のためにオピオイドを使用していた。使用薬剤はモルヒネ、オキシコドン、メサドンであった。オピオイドの種類に関わらず、全ての患者において服用開始3日以内に排便が認められた。ナルデメジン服用前に使用していた緩下剤は酸化マグネシウムが多く、センノシド、ルビプロストン等の使用例もあった。ナルデメジン開始前から服用していた緩下剤はナルデメジン開始後も継続されている場合が多かった。ナルデメジン服用により1日の排便回数増加は認めたが、下痢症状が継続することはなかった。悪心、嘔吐の有害事象が出現した患者はなかった。経口摂取困難によるナルデメジンの服用中止例は認めたが、有害事象発現による服用中止例は認めなかった。

【考察】

今回の調査ではナルデメジンは有害事象なく安全に使用することができていた。ナルデメジンの効果発現までの期間と使用しているオピオイドの種類には関係性がない傾向であった。緩下剤を使用している便秘傾向である患者に対して、ナルデメジンを追加することにより症状緩和が期待できる。ナルデメジン使用により排便回数の増加は認めたが、硬便が継続している症例もあり、併用する緩下剤の種類や用法用量の変更も検討する必要があると感じた。今後はナルデメジン使用症例数が増加することが予測されるため、さらに症例数を増やして検討を行っていききたい。

(847/1000 文字)